

第5回沖繩宣教研究所・富坂キリスト教センター共同研修会 講演Ⅱ

「良いヤマトンチュ」の神学を求めて：
加害者的依存脱却、そして神の民へ¹

濱野 道雄

はじめに

今回第5回になる共同研修会にはこれまで参加したことはなく、そして今回で最終回となり、総括的な集まりになると伺いましたが、私はそのような総括的なお話は当然できませんし、講師として相応しくない、もっと相応しい方は沢山いらっしゃるだろうと今も思っております。実際、これまでの研修会の記録を拝読しましても、私が思い及ぶようなことはもう既に語られており、私が繰り返して何になるのだろうとも思います。そのような者としてできるお話をさせていただくことでお許してください。

ただそれでも今回、このお話を受けさせていただいたのは、私がヤマトの人間だからです。今、沖繩が負わされている様々な課題、軍事的、歴史的、社会的、経済的、そして宣教的な課題は、本来沖繩の問題ではなく、ヤマトの問題であり、自分の問題について話をする責任が当然ある、課題を解決する責任を十分にはとれなくても、せめて説明責任がありますので、お受けさせていただきました。まず、ヤマトの人間として、このような研修会を開かなければならない痛みを沖繩の皆様がこれまで負わせてきたし、いまなお負わせ、さらに負わせたことにすら気づかない、気づこうとしていないヤマトの人間としてお詫びいたします。

そしてヤマトが加害者として沖繩に暴力をふるう形で依存していくことを止める、天皇制とアメリカの「奴隷」であることを止める、「奴隷」であるのにそのついでに沖繩に回してごまかすのを止める、ヤマトこそが自立していくそのために、またヤマトの教会がイエスの示した教会に、神の民になっていくために、沖繩の皆様がお力を貸して下さい、これからもお力を貸していただきたい、そのことを心よりお願い申し上げます。ヤマトはヤマトだけでは自立できないし、ヤマトの教会はヤマトの教会だけでは解放された神の民になれないと、本当に勝手ながら、しかし切実に思うのです。前回の研修会で、神谷さんが琉球独立を神の国宣言としてとらえていらっしゃいましたが、ヤマトの教会もまた神の民としての自立宣言を神の国宣言として、自立していないヤマトのただ中で、イエスが

したように、この世の国らしくない国としての宣言を行いたいのです。

このようにこれまでも沖縄の皆様に教えられつつ、沖縄の神学と対話して、ヤマトの神学をどのように言葉にできるのか探ってきました。今回、準備するにあたって、饒平名長秀氏の『待ちつつ、早めつつ』をもう一度読み直しました。私などが考えることは饒平名氏がすでに言葉になさっている、というより饒平名氏に教えてもらったのだと思いつつ、しかし今度は私の言葉で応答すべきだし、させてください。

今回タイトルを「『良いヤマトンチュ』の神学を求めて」としましたのは、やはり『待ちつつ、早めつつ』に収められた饒平名氏の言葉からいただきました。饒平名氏がこの共同研修会の第1回目の講演でお話しになったことから、共通理解を繰り返しているならお許しください。その本から引用します。ヤマトンチュで「ウチナンチュになろうとしてなれないことが分かった人は、ウチナンチュと心の結びつきができるんですよ。逆説的に。自分はだいたいウチナンチュがわかったという人は鈍感な人ですね。これは全然わかってない証拠です。我々もそう簡単にヤマトンチュになれないのですから。(中略)ですからわたしは、(中略)『良いヤマトンチュになってください』と、本土(ママ)からこられた先生方には言いたいです。」²そう、おっしゃっています。

饒平名氏はこの本の中で個人的な体験を繰り返し語っていらっしゃいますし、私もそうさせていただきますが、私が思い浮かべたひとつは、アメリカに留学している時のことです。私は広島生まれで、私自身は「広島神学」を考え続けている者です。母は8歳の時に被爆し、放射線障害をその身に負って生きた人で、私は被爆2世です。ですから原爆を落としたことについて振り返りもせず、戦後も戦争をずっと続けているアメリカの神学に学ぶこと等そうないだろうと思っていましたが、仕事で行けと言うのでできるだけともそうな神学校を選んで、カリフォルニアの太平洋神学校へ行きました。ただ、やはりアメリカ人はアメリカ人で、平和だとか愛だと言っても、今も世界に、沖縄に暴力をふるっていることをどう思っているのだろうと思っておりました。しかし、ある日、一人の白人男性の教員でしたが、私に「ヒロシマに原爆を落としたことを、アメリカ人として謝罪する」と頭を下げられたことがあります。私にとってそのようなアメリカ人との出会いは初めてでしたので、驚き、しかし「心の結びつき」ができたと思いました。本人が「アメリカ人として」と言ったとおり、アメリカ人はアメリカ人

なのです。変わることはできません。でもそれで良いし、それが誠実な態度なのだと思います。私も日本人として、同じクラスに留学していた韓国人留学生のクラスメイトたちのことを、親しくしておりましたけれども、分かったなんて言えない。でも分からないままで、私が今度は韓国人のクラスメイトたちに、日本人として戦争責任を謝罪する、そんなことが続きました。

ですから、私はウチナンチュのみなさんが分かったなどとは言えないし言いません。良いヤマトンチュであるとも言えませんが、良いヤマトンチュになることを求めるものであるとは言わせて下さい。

かといって、広島と沖縄の物語が同じだとも思っていません。広島は日清戦争の時に大日本帝国の大本営になってから、日本の中でも屈指の軍都でありました。今も江田島や呉には海上自衛隊の大きな基地があります。そして太平洋戦争は、勿論日本が始めたものです。現在、アメリカの歴史学者たちによっても、戦争を止めるために原爆は必要が無かった、天皇を守るために沖縄同様に広島、長崎は捨て石にされたということが、歴史的証拠と共に言われています³。ただし、それでも日本が、広島が戦争を始めなければ、今岸田政権が準備しているように先制攻撃をしなければ、原爆を落とす少なくとも実をアメリカに与えることは無かったはずです。ですから、沖縄と広島は同じではありません。

ただし、それと同時に、当時広島で、やがて放射線障害で亡くなる6歳の妹と二人で焼け野原を逃げ回り、黒い雨にうたれた8歳であった母の命は、沖縄で鉄の雨、鉄の暴風から逃げ回った沖縄の子どもたちの命と、同じ神から与えられた命でした。ここに「違う」と、「同じ」の二重性が、一回区別して考えるべき、しかし切り離せない二重性がある、そのことを今日のお話のキーワードとしたいと思います。

また私は福岡に来る前は東京に住んでおまして、家族は今も東京に住んでおります。それは羽村というところですが、横田基地のすぐ隣です。羽村市の面積の4.2%、隣の福生市は32.4%が横田基地です。羽村に住んでいた頃、米軍基地関係者による暴行事件は複数で起きていました。また性暴力も、例えば2013年から2016年の間の数ですが、普天間基地関連が54件であるのに対して横田基地関連は37件です⁴。我が家の窓をあければオスプレイが、普天間のものより事故率が高いタイプのオスプレイが、あの独特の爆音を響かせながら飛んでいます。今問題が発覚した有機フッ素化合物による水の汚染も、住民の血液調査によれば多摩地区も沖縄を少し上回る割合で住民から検出されています。住民による基地

反対デモもあり、私も住んでいる頃は、基地反対デモに参加していました。

ただし、羽村と沖縄が同じだというつもりは、やはりありません。羽村はヤマトで、ヤマトンチュたちが国会で決めて、そこに横田基地があることをよしとしているからです。普天間は、アメリカが、そしてヤマトが決めて、ウチナンチュたちが決めたのではなく、ヤマトが沖縄を植民地支配して、そこに基地を置いているのですから、違う話です。

ただ、それと同時に、今、有機フッ化水素の入った水を飲む子どもたちの命は、同じ神がおつくりになったものです。ここにも二重性があります。

ですから、今日は広島の新学を考える、横田基地の横に家族が住む、しかしそれでもやはりヤマトンチュとして、もっと言えば男性で、異性愛者で、シスジェンダー以外の視点をもっているなんて言えない者として、このような二重性の中から話をさせてください。

1. 「沖縄の神学」と対話しつつ

本論に入っていきます。「良いヤマトンチュの神学」ですが、第一に、過去から現在において、つまり歴史と現実において、ウチナーとヤマトを、異なる民、それぞれのアイデンティティを持つ民であるということ的前提として考えたいと思います。第二に、この異なる民は、しかし一つの神の民として、未来において、終末にむかって招かれているし、そうなることが現在すでに約束されているということを考えたい。そして第三に、異なる民であり、しかし同時に一つの民となる約束を得ている、その二重性を生きている、その接点に「痛み」がなる。「痛み」において私たちは一つの民へと招かれて行くし、断片的にも実現し始めているのだということを考えていきたいと思います。まずその3つのことを、最初に神谷さんや饒平名氏といった方々の「沖縄の神学」との対話の中で確認します。

次に聖書を読み直し、最後にこれから私たちは、教会はどうしていくのかということを考えたいと思います⁵。

ただし先に2つのことをことわっておきます。

一つは、この二重性ですが、もっと厳密に言えば、三重性がそこにはあります。饒平名氏は『待ちつつ、早めつつ』の中で「琉球人の二重の自己意識」に触れ、「琉球人」と「日本国民」の二重の自己意識をウチナンチュはもっていると言います⁶。その二重性、と私が言う二重性は別のものでして、饒平名氏はウチナンチュであ

りつつ、日本国民であるという二重性のことを言っています。これもとても大切なので、この二重性の上に、さらにもう一つ、これは饒平名氏も指し示していますが、神の民というアイデンティティを今回は加えたいのです。ですから、順番は前後しても良いのですが、同じ日本国籍者であるという層、違うウチナンチュとヤマトンチュであるという層、そして同じ神の民であるという層の3重性がそこにあるというのが厳密なところだと思います。

やはりこの、同じ日本国民であることの層もとても大切でして、日本バプテスト連盟の話をすれば、大きな問題があったし、今もまだあると思います。日本バプテスト連盟では沖縄「国外」伝道に関する総括文を2回、1991年と1998年に出しています。98年の方⁷の資料を参照してください。日本バプテスト連盟は1955年に沖縄で伝道を開始する際に、沖縄を無反省に「国外」に位置付けてしまった事、それに関連する宣教論に問題があった訳です。そこではヤマトによる日本政府が行った戦後の沖縄切り離し政策を無批判に受け入れたことが反省されています。これもウチナーとヤマトを分けて考えているのですが、それは悪い意味で分けています。その歴史や関係性を無視して、単純にヤマトによる日本政府がウチナーは日本と「違う」と言えば違う、「同じ」と言えば同じと考えたということです。これではヤマトの教会が自らの加害者的依存に気づくことも脱却することもできない訳です。

もう一つことわっておきますが、これも饒平名氏に教えられつつ、今回は沖縄をウチナーあるいは沖縄と呼び、それ以外の日本から、アイヌの人々や在日コリアの人々、在日中国人や他の在日の人々を除いたものをヤマトと呼びます。そしてウチナーそしてそれぞれの歴史やアイデンティティとなる物語をもつ集団を、ヤマトをあわせて日本と呼びたいと思います。饒平名氏はウチナーとヤマトを合わせて日本と呼んでいます⁸、私は他の集団もヤマトとは分けてから、日本の中に位置付けて考えたいと思います。

1) - 1 ウチナーとヤマト：プロセスとしての神の「国」

第一に、過去から現在において、つまり歴史と現実において、ウチナーとヤマトは異なる民、それぞれのアイデンティティを持つ民であるということを考えます。これによってヤマトの植民地主義が「見える化」されるでしょう。

まずウチナーとヤマトの関係にある程度整理しておくことには、キリスト教倫理的な意味もあります。キリスト教倫理学は一般的に、3つの類型に分けられ

ると言います。第1に、正しいルールを求める戒命倫理で、正統主義的の神学に多いものです。そして第2に、正しい目的を求める目的倫理（あるいは、合理性を求める熟慮倫理）で、自由主義的の神学に多いものです。そして第3に、正しい関係性を求める応答倫理で、解放あるいは物語の神学に多いものです。この3つに、キリスト教倫理学は分類されることがあります。どれが正しくどれが間違いだという話でもないと思いますが、私は応答倫理をまず考え、つまり正しい関係をまず考え、それからあとの二つ、正しいルールと正しい目的を考えるのが良いと思っています。その場合、人と人の、民と民の、そして勿論神と人の、さらには全被造物間の正しい関係とは何か、それぞれの人や民がもつべき、「徳」と呼ばれますが、その「徳」、性質、ライフスタイルは何かを考えていきます。ですから、まず民と民の、ウチナーとヤマトの関係を考えておかなければ、正しいルール、つまり何をなすべきか、正しい目的、何を目指すべきかについても、少しずつずれが出てしまうのではないかと思うのです。

特にいわゆる「基地県外移設論」や「琉球独立論」において、そのような議論のすれ違いが起こりもするのではないかとも思うのです。このような応答倫理は個々の関係の中で起こりますので、ハンドルではなく、アクセルとブレーキとしての倫理になることが多いです。たとえば「県外移設論」は沖縄の皆様の中でも、またヤマトの中でも、これまでの研修会記録を見ても何が正しい選択か、必ずしも一つの意見にはなっていないと記録を読みました。実際に何かを私たちは選択する、ハンドルを右か左かにきるべきですが、その前にまずは議論を早めたり、逆に時間をかけたりアクセルとブレーキのどちらを踏むべきか見極める。そして右に切った人と、左に切った人の間が分断されないように正しい関係を保つ。そのような倫理になると思います。

このようにウチナーとヤマトの関係を考える時、まず歴史と現実において異なる民、それぞれのアイデンティティをもつ民であるということ、どういう意味でそう言えるのか考えてみましょう。これも饒平名氏の、この研修会の第1回目の講演を拝読しますと、まず歴史的に、「沖縄というところ、琉球は、十六世紀ぐらいまでは、れっきとした独立国」⁹であったことが確認されています。そして民俗学的文化的にも異なる民だということも確認されます。さらに「国際法的には琉球はどこの国にも属していない」¹⁰こと、つまり所謂「琉球処分」というヤマトのウチナーへの侵略において、日本から清国に提案された宮古・八重山分島

案が（勿論、この案自体、植民地主義の典型的なものです）現在に至るまで中国には認められていないということが挙げられています。

そのような事実は勿論大切です。例えば昨年9月に行われました安倍元首相の国葬儀に際し、47都道府県の内、半旗や弔旗の掲揚は沖縄のみ実施しませんでした。国葬に参列した知事は42人でしたが、沖縄の玉城デニー知事は欠席しました。ここでもやはりウチナーとヤマトは歴史的にそもそも別の民と分けて考えないと、国葬を強制するという問題は植民地支配問題だという事が見えにくくなると思われました。敢えて言えば別の「国」であるウチナーに、国葬に参加するようにさせる意味は何でしょうか。

沖縄の人にとって安倍政治は辺野古の基地建設一つをとっても、沖縄に苦しみを増加させるものでした。でもこういうときだけ、「同じ日本人だろう。亡くなったのだから、国葬に参列しなさい、反対するのは美しい行為ではない」と、死者を利用して植民地主義を拡大させようとする。それを沖縄は拒否したということではないでしょうか。

このようにウチナーとヤマトは異なるアイデンティティをも持つことを前提としなければ、植民地主義が見えにくくなってしまいます（アイヌ新法の問題点もそこにあるでしょう）。例えば、キリスト教関係で沖縄に関する反基地の運動などを行っているグループを見ましても、平和を求めようとしていること自体は当然賛同するのですが、たとえば「沖縄に寄り添う」とか「沖縄に連帯する」とかの言葉を見ますに、私は違和感をおぼえます。いや、これは「大変な沖縄、かわいそうな沖縄に寄り添ったり、連帯する話」ではなく、ヤマトの問題だから違うと感じます。例えば、ドメスティックバイオレンスがある。その時、加害者が被害者に「寄り添う」とか「連帯する」とかいう表現が使えるでしょうか。これこそドメスティックバイオレンスの暴力性を隠蔽する表現にならないでしょうか。勿論、沖縄の皆様が「連帯を喜ぶ」という言葉を使ってくくださるから、それを感謝して受け止めてヤマトも使うということが起こっているのだとも思いますので、言葉狩りをするつもりはありません。

さらに言えば、高橋哲哉さんの「犠牲のシステム」¹¹の犠牲と言う言葉にも混乱を呼ぶ曖昧さがあるので、もっと別の表現が良いのかもしれないと思います。犠牲と言えば、自分たちの同じ仲間の中から誰かが外れくじを引く、というニュアンスにならないでしょうか。実際、例えば手許の広辞苑を見ますと、「犠牲」には3つの意味があり、1番目は宗教的な意味なので省略しますが、2番目は「身命

を捧げて他のために尽くすこと。ある目的を達成するために、それに伴う損失を顧みないこと。」、3番目は「自分の意志によらず戦争・天災・事故の巻きぞえなどで生命を失ったり傷ついたりすること。」¹²となっています。この2番目の意味ではやはり仲間内から誰かが損失を被るという意味です。3番目なら良いかと申しますと、「自分の意志によらず」とはありますが、沖縄が経験していることは、「戦争・天災・事故の巻きぞえ」、つまりたまたま運の悪いことにそこに出くわせたというより、悪意を持って狙い撃ちされた「ヤマトによる植民地支配」という犯罪なので、ただ巻き添えにあったという話でもないでしょう。高橋さんは「犠牲」と言う言葉で、『国家と犠牲』¹³では広島や長崎の被爆者の事等を、また『犠牲のシステム』では福島と沖縄の事を呼んでいますが、ここにはやはり一度区別が必要に思えます。

1) - 2 県外移設について

ですから『福音と世界』の2018年3月号で「犠牲の再生産に抗うために」¹⁴というタイトルで、米軍基地の「本土」引き取り論を展開する高橋哲哉さんと3人の若手の神学研究者が座談会をしているのですが、「犠牲」とは何か曖昧なまま、それにフォーカスを当てているために話がかみ合っていないのかも思いました。沖縄が経験していることは、そのような「犠牲」とはまた別だということです。高橋さんはウチナーとヤマトは違うという第1の層、「沖縄への構造的差別をやめる」という視点から語ります。それに対して3人の研究者は誰も犠牲にされない目標としての神の「国」という第2の層から語ります。その結果「基地はどこにもいらない」論で、移設先で犠牲の再生産、つまり女性や子どもたちが被害を受けるということが言われます。そのような論に対して高橋さんは『日米安保と沖縄基地論争』の中でより展開されていますが、それでは沖縄の現在の女性や子どもは勿論、将来の世代に犠牲を拡大再生産させるのは良いのかという趣旨で反論しているでしょう¹⁵。それぞれもっともなのですが、論点がずれているかもしれないと思いました。

この研修会でも基地の県外移設について、特に第3回の研修会で話されています。神谷さんはそこで沖縄内でも、理論的にも運動効果論的にも、県外移設論について賛否様々な意見があることを指摘された後に、「『県外移設』（沖縄の基地を引取る）」への取り組みは、日本で展開していくべき課題です。」¹⁶と結論しています。つまり第一義的にウチナーの課題ではなく、ヤマトの課題だと言うのです。

高橋さんが言うように「県外移設」が第1の層、つまりウチナーとヤマトの差異の層に生じる関係倫理の課題ならば、神谷さんの言う結論になるのは正当なことでしょう。

その結論の直前に、ではどうするか、具体的な次の一步として語られているのだと思いますが、神谷さんはゴスペルを歌う会の話しをしています。私も、この違う二つの層の接点は具体的な「痛み」で切実さをもって連帯する事にあり、その時あれかこれかではない、両方強調していく運動展開の可能性があると思います。神谷さんの講演にあった「日米安保の必要性を八割以上の日本人が求めているのであれば、沖縄の米軍基地（在日米軍基地7割余も沖縄に集中）を、日本の独立と同時に米軍基地を日本国内にもっていくべきであろう。」¹⁷との言葉にまず立って高橋さんの主張を認め、それを忘れないままに第2の層との接点を「痛み」に見出し、3人の研究者の主張する内容をも求めていくのです¹⁸。

ただやはり先ず、歴史と現状においてウチナーとヤマトは別の民であるということ的前提とすることで、植民地主義の見える化をしておきたいのです。この二つの民の「同化視」、「混同」は二つの民が異なるものでもあるという点を意識的、あるいは無意識的にも無視したことから起こる問題だと思います。なぜこのような「混同」が起こるのか。

1つには、先ほどの国葬の件などもそうですが、「もはや同化したのだから、自己主張をするな。そうでなければ管理しづらい」という植民地主義にあるでしょう。

ただこのような混同がキリスト教会でも起こるのは、最初に申しました二重性に拠るのかもしれませんが。私たちは別の民であり、しかし同時に一つの民となる約束を得ている、この二重性です。この内、別の民であるという事を抜かして、しかし私たちは和解できる一つの民であるということに一足飛びに飛びついてしまう。

別視点からの例になりますが、例えばハラスメントが教会であったとき、被害者に「キリスト者だから加害者を赦して和解しなさい」と早急に言い、二次被害を出すということを残念ながら教会における少なくないケースで聞きます。

神学的、あるいは宣教論的にそれを確認しておきますと、例えば世界教会協議会(WCC)が2005年に出した「和解のミニストリーとしての宣教」という文書に¹⁹、こういう言葉があります。「和解は、到達すべき目標であると同時にプロセスである。個人としても、社会としても、私たちは平和で幸福な将来に向けてのビジョンを必要とする。プロセスへの理解を欠くとき、私たちはこの働きを担う

意志や方向性を見失うことになる。実際の和解と癒しの実践において、私たちは到達すべき目標とプロセスの両方を必要とするゆえに、両者の間を行きつ戻りつすることになるのである」²⁰。ではそのプロセスとは何か。「和解と癒しのプロセスにおいては、真実、記憶、悔い改め、正義、赦し、愛の六つの側面に注目する必要がある。」²¹とあります。プロセスを端折って急ぎすぎ、目標やゴールばかり強調するならば、ゴールには決して至りません。しかしゴールを見据えなければ、プロセスで間違えます。ここでこの和解を、平和（シャローム）や神の「国」ととりあえずは同じ意味でつかわせてください。聖書において神の「国」も和解も、平和も、歴史における神の働き、神の宣教、ミッシオ・デイだからです。それらは皆プロセスです。しかし同時にすでにその終末は約束されているので「両者の間を行きつ戻りつする」のです。私の話もここから「行きつ戻りつ」しますので、少し分かりにくく聞こえるかもしれませんが、言っていることは単純なので、ご理解頂けるのではないのでしょうか。

ハラスメントの話をしました。ウチナーに対してもヤマトのキリスト者が犯しがちな過ち、二次加害があるのではないのでしょうか。私たちは未だ正しい関係にはない、寄り添ったり連帯する資格もない。ただしいつか、私が死んでからかも知れない、この世界の終りの日かも知れない、その日にいつか正しい関係に戻され、和解して共に生きるようになると、聖書に記してある神の約束を待ち続けている存在だと思います。

この一次、二次の加害をヤマトが加える時、神谷さんの講演の中にあつたように、ウチナンチュの「怒り」が出てくることは当然であるだけでなく、必要な、ヤマトンチュすら最終的、終末的には解放していく「正しい怒り」と言えるでしょう。神谷さんは「正しい『怒り』は存在するのか？」と、今回事前に頂いたレジュメには書いていましたが、聖書的にもそれは存在するでしょう。例えば、詩編4:5「怒りに震えよ、しかし罪を犯すな。床の上で心に語り、そして鎮まれ。」²²とあり、これはエフェソ書にも一部引用されています²³。「怒りに震えよ」、これは命令法ですが、怒ることの重要性を語っています。「しかし罪を犯すな」の「罪」ですが、「目的を見失う」「自分を失う」といったニュアンスがある「ハット」に関連する語が使われています。正しい怒りを怒るべきだ。正しい怒りとはそれで自分の人生を壊すようなものではなく、神谷さんの言うように「生きる」ことを是とし、加害者をも悔い改めに招く怒り、ということではないのでしょうか。ここでも「両者の間を行きつ戻りつする」わけです。つまり怒りは正しい、けれどそれは自分を生き

るためだし、神の約束の実現に向かうものであること、その両方を忘れないことです。

ここまで神の「国」はプロセスであり、違いを違いとまず認めるプロセスを歩むことが私たちには求められていることをお話ししました。

2) - 1 目標としての神の「国」

そしてここから、プロセスである神の「国」は、同時に目標でもあることを考えていきたいと思います。つまりこの異なる民は、しかし一つの神の民として未来において、終末にむかって招かれているし、現在すでにそうなることが約束されているということを考えたいのです。

私たちはそれぞれの民ですが、同時に一つの民となることが約束されているし、「今は、鏡におぼろに映ったものを見て」(1 コリ 13: 12) いるようでも、実際、一つの民として生き始めています。

神谷さんの講演で言えば、それは「いちゃりばちょうでー」に表れています。「怒り」と同時に、「いちゃりばちょうでー」をウチナンチュは表す。それに対してヤマトが「いちゃりばちょうでー」を喜んでばかりで、「怒り」に聴こうとしないなら、つまり「一つの民となる約束」であることばかり喜んで「別の民であること」に気づこうとしないなら、それは「正直者を馬鹿にする」ヤマトのキリスト者になってしまう。そうではなく、「怒り」を引き起こしている自らの加害者的依存を一步でも脱却しようとし始める時、初めてこの「いちゃりばちょうでー」で、一つの民として実際に生き始める、その一步を歩みだせるのかもしれませんが。

この約束としての一つの民ですが、その約束は聖書を通して表されているでしょう。イザヤ書では「狼は小羊と共に宿り」(11:6) との幻に、端的にそのヴィジョンは描かれています。またイエスの語った神の「国」にそれは表れているでしょう。

ルカ 13: 29 ですが、「人々は、東から西から、また北から南から来て、神の国で宴会の席に着く」とイエスはいいました。この東から西から、また北から南から来る人々というのは、当時のユダヤ民族だけでなく、全ての民族が神の「国」の食卓にやってきて、同じパンと盃を分かち合うという事です。またパウロも言います。「私たちの国籍は天にあります。そこから、救い主である主イエス・キリストが来られるのを、私たちは待ち望んでいます。」(フィリピ 3: 20) ここにも同じ天の「国」、神の「国」の国籍を私たちは持つことが記されています。

ただし、急いで先ほど申し上げたことを振り返って確認しておきますと、イエ

スの「神の国で宴会の席に着く」は未来形の動詞が使われておりまして、まだプロセスは最後まで至っていません。まだ途上です。ですからこれは目標としての神の「国」、あるいは約束としての神の「国」と言ってもいいでしょう。パウロの場合も「そこから、救い主である主イエス・キリストが来られるのを、私たちは待ち望んでいます」とあります。私たちは待っているのです。まだその天の国には至っていない。待ちつつ、ただ同時に早めつつもあるということです。早めるだけでまだ目標には達しません。しかし神の約束、最後には私たちが異なるままに、しかし涙も痛みも無くなり、共に同じ食卓に着く、その神の「国」がくる主の日が一日でも早くなるように、何事かにそれぞれ務める。待つだけでなく、早めることが私たちはゆるさされている。「両者の間を行きつ戻りつする」わけです。片方だけじゃない。ここにも二重性があります。

2) -2 琉球独立論について

このことは、饒平名氏の講演ですと「方便」としての琉球独立という言葉にも表されていると思います。第1回合同研修会の質疑応答の部分での発言ですが、饒平名氏がそのレジュメに『「方便としての独立」とわたし書いたのは、わたしは根本的に国家を信用していません。少なくとも今の近代国家ですね。根本的に国家というのは、なくならねばならないと思います。』²⁴あるいは琉球独立論というのは、現実の状況の中にあって、「経過的」なものとか「戦略」という言葉で説明しています²⁵。つまりプロセスな訳です。このプロセスとしての神の「国」は大変重要なのですが、それだけでは終わらない。経過してその次が目指されている。

そのプロセスの向こうに、目標としての神の「国」を饒平名氏は見ていると言えるでしょう。「先ず日本から解放されねばならないので、独立して、琉球国家を再生させる、よみがえらせる。

でも国家には限度があります。権力支配ですから、本質的に悪がまわりついています。小さな国家でも、国家の再生産になりますから。しかし戦略として一応独立して、それから国家がなくなる方向を、琉球国は率先して探っていく。そして世界に発信していく。国家なしに幸せにやっつけける集団があるんだということを。そこにキリスト教信仰が大きく関わってくると思います。神の国、神の王国＝神の支配。』²⁶ 饒平名氏は神の国宣言をする訳です。ここには最終的な目標、あるいは約束としての神の「国」があるのでしょうか。そしてこの両方、プロセスと目標と言う神の「国」の両面を忘れず、実際に「両者の間を行きつ戻りつする」

ことが重要に思えます。

3) - 1 両者を「つなぐ」痛み、十字架

第三に、別の民であり、しかし同時に一つの民となる約束を得ている、その二重性を生きている、その接点に「痛み」がなる、「痛み」において私たちは一つの民へと招かれて行くのだということを考えていきたいとします。どうやって「両者の間を行きつ戻りつする」のか、とも言えます。

神谷さんの講演で「いちぢりばちょうでー」とは、「よきサマリア人」の箇所にてでくる「隣人を自分のように愛しなさい」(ルカ 10:27)という言葉に重なると言っていました。そのよきサマリア人が、路上に倒れている人と、そしてイエスとどこで接点をもったか、それは「痛み」であったと言えるでしょう。パレスチナの和解の神学を展開しているサリム・J・ムナイヤー氏は、路上に倒れていた人がユダヤ人であると明記はされておらず、サマリア人、ユダヤ人の違いは先ず衣服で判断されたが、それを強盗に奪われ何人か判断がつかない目の前に倒れている人と、具体的な「痛み」がゆえにサマリア人との接点が生まれたのであり、イエスは、そしてイエスの指し示す神はその接点を喜んだと言います²⁷。

その具体的な例として、緑ヶ丘保育園に起こった米軍ヘリ部品落下事件と、それに対する緑ヶ丘保育園の父母会、神谷さんの働き、そしてそれに不十分ですがヤマトの教会の自分事として関係させていただいた出来事もあたるかもしれません。神谷さんに伺いますと、父母会の皆様の中でも、基地反対の方、基地関係者の方など色々違いを持つ方々がある。その基地に対するスタンスも色々違う。けれども、子どもたちの命を守る、その一点でつながる運動だとおっしゃいました。ヤマトの教会としても、私の鳥栖教会にも来ていただき、十分ではないですが募金も集めさせて頂いたり、また西南学院大学のチャペルでもご講演いただきました。「異なる者」だけれども、具体的に目の前で一つできる何かがある。そこで「私たちは違う」「それでも一つになることが約束されている」の二重性が具体的な痛みの一点で接点を持ち始める経験、「行きつ戻りつする」経験だったと思います。

饒平名氏が、沖縄の神学を希望の神学、道程の神学と呼び、ヘブライ 12:1～13をあげていますが、そこには「信仰の導き手であり、完成者であるイエスを見つめながら、走りましょう。この方は、ご自分の前にある喜びのゆえに、恥をもいとわないで、十字架を忍び、神の王座の右にお座りになったのです。」(12:2)とあります。イエスを見つめながら、プロセスを生きる。そのプロセスにおいて

は十字架がある。痛みがある。しかしその先に、神の王座がある。神の「国」がある。

痛みにおける連帯というのは、広島を神学を考える時に私は重要な考え方だと思ってきました。栗原貞子氏の「ヒロシマというとき」という詩があります。「<ヒロシマ>というとき<ああヒロシマ>と／やさしくこたえてくれるだろうか／<ヒロシマ>といえは<パウル・ハーバー>／<ヒロシマ>といえは<南京虐殺>／(中略) <ヒロシマ>といえは／<ああ ヒロシマ>と／やさしくかえってくるためには／捨てた筈の武器を ほんとうに／捨てねばならない／異国の基地を撤去せねばならない」²⁸ まさにここに広島を神学としての基地問題があります。「その日までヒロシマは／残酷と不信のいがい都市だ／(中略) <ヒロシマ>といえは／<ああヒロシマ>と／やさしいこたえがかえってくるためには／わたしたちは／わたしたちの汚れた手を／きよめねばならない」²⁹ このような詩ですが、異なるものが、それでも共に生きたいと願うなら、他の人々の痛みを私の事として受け止めること。その時、共生が始まるというのだと思います。

3) - 2 植民地主義と性差別主義について

このように具体的な痛みと共に立つ時に、二重性の間に接点が出来始めるのかもしれませんが。この研修会を企画するにあたり、女性たちや性的少数者の声をもっと講演などであった方が良いのでないかという意見も聞きました。私もそう思います。ただ一方で、そのことで軍事化への間いが薄まらないかとの声もありました。富坂キリスト教センター編の『沖縄にみる性暴力と軍事主義』にあった言葉ですが、「私たちは基地と軍事化への抗議行動だけではなく、日常生活の営みの中で軍事化への抵抗をどのように実践できるのか」³⁰とありました。これをウチナーの軍事化の問題とウチナーとヤマトにおける性暴力の問題と二分化されたものというなら、沖縄の軍事化問題が薄まることになるのだと思います。しかしこの本で行われているのは勿論そのようなことではなく、もう少し私の読み込みで言わせて頂ければ「軍事化への抗議行動を徹底するために、日常生活の営みの中で軍事化への抵抗をどのように実践できるのか」ということだと思います。あれかこれかではなくなる形、二重性のその向こうを、性暴力を受けた人や歴史に聴くことが示すのだと思います。

玉城福子氏の『沖縄とセクシュアリティの社会学』でも「フェミニズム研究、沖縄研究、ポストコロナル研究の視点、いずれが抜けても、沖縄における性暴

力や売買春をめぐる記憶を十分に捉えることができない」³¹とあり、実例として沖縄県平和祈念資料館展示改ざん事件における「慰安所」とAサインバーの展示に着目しています³²。祈念資料館で日本軍の残虐性が隠蔽されるような展示案変更が業者になされたことが発覚し、多くは原案に戻されたものの、「慰安所」とAサインバーの展示においては議論の焦点にならず、実際に変更が行われもしたというものです。この痛みを究明することが、ヤマトとしてはウチナーへの加害を止めることの徹底化となるのだと思います。

ここまで申し上げてきたことをまとめます。良いヤマトンチュが神学をしていくときの立ち位置ですが、「踏む足をどけ（なければならぬ）、謝罪し、教えてもらい、自分で立ち、具体的な痛みにおいて連帯をゆるされ、共に生きる事を目指す」ということになるでしょう。

2. 聖書を読み直す：神の「国」、あるいは神の民について

1) 聖書における、神の「国」と神の民

この立ち位置から聖書を読み直していきましょう。ここまで神の「国」はプロセスでもあり、目標でもあり、その二つは「痛み」において現実的に接点を持つと申してきました。聖書を読み返してみましよう。

まずそもそも「神の国」とは何かを確認してみたいと思います。領土的な意味合いももつ「神の国」、バシレイア・トゥ・テウーと言う新約聖書の言葉に直接対応するヘブライ語聖書の言葉はありません。ヘブライ語聖書の場合は「神の支配」、マルクト・アドナイという言葉しかなく、ここには領土的な意味合いはなく、神の王支配という意味合いの言葉です。

ここで考えてみたいのは、そもそも「神の国」は「国」や「王としての支配」なのか、ということ。もしそうであれば、饒平名氏が言うように、神の国もまた「権力支配ですから、本質的に悪がまわりついて」³³いることになるのでしょうか。そうではないのだろうか、今回、神の「国」と国に鍵括弧をつけてみましたが、その方が結論的には正しい表現方法に私には思えます。

しかしこの誤った理解が教会の歴史には大きな影響を与えてきたと思います。実際、キリスト教がローマ帝国で国教化されて以来、ローマ・カトリック教会の宣教論は、その宣教地を教区と呼び、その教区そのものが神の国として認められ、

それを広げることが宣教、伝道と呼ばれたわけです³⁴。デイヴィッド・ボッシュは言います。「アウグスティヌスが可視的な教会を決して神の国、神の支配と同一視していなかったことを指摘しておくことは重要である。だが彼に続く数世紀において、神の国という理念は事実上、可視的ローマ・カトリック教会という理念にまったく融合してしまった」³⁵。そこで神の国=教会=法皇が神に代わって支配する領域となっていくます。

私たちの教会においても、教会が教会外の世界を「罪の世界」と見下げ、基地問題にせよ SOGIE に関する差別にせよ、対話をやめる、その実教会内のその問題で痛みを持つ人の声をも聴かないならば、饒平名氏の言葉に従えば、教会も一つの「神の国」として、また「悪がまとわりついて」いるのでしょうか。実際、ヨハネ黙示録に記された神の「国」には、人々と共に移動する幕屋は出てきても、神殿は、いわば内外の境界を定める教会はもはや出てきません。バウンダリーセットの教会もまた、国と同様に、やがてなくなることを自らの目標とするのだと思います。しかしプロセスにおいては必要なもまた神の「国」としての教会と言えるのでしょうか。終末までは「行きつ戻りつ」が続きます。

1) -1 ヘブライ語聖書の「マルクト・アドナイ」

聖書を読み直すために、まずヘブライ語聖書の「神の王支配」という言葉を見ていきましょう。しかしこの言葉、それほど多く出てきません。詩編や歴代誌の、ヘブライ語聖書の中でも後期の文書にかたまって出てきます。さらに言えば、神を王と例えること自体、それほどヘブライ語聖書の中心的な考え方でもありません。神を王と呼ぶのは、むしろバビロニアや、ウガリットなどの、周辺諸国の神々においてでした。しかも神々の中の王、という意味で、マルドゥクとかバアルなどが王と呼ばれていました。ヘブライ語聖書において、人々がカナン定住するまでは神は王とは呼ばれません。カナン定住後その周辺諸国の影響を受けて神を王と呼ぶものの、主なる神（ヤーウエ）が他の神々の王であるというのもヘブライの信仰に即しませんから、イスラエルの王と呼ばれるようになります。

しかし王と言うものに対する評価は、ヘブライ語聖書の中で必ずしも高くありません。以下、聖書学者の須藤伊知郎氏の文章を主に用います。

「そもそも『王』についてヘブライ語聖書にはアンビバレントな叙述が記されています。一方にはダビデの王権、王家を讃美するものがありますが（たとえば王の詩編、Ps 2; 18; 45; 72; 89; 110 等）、他方には預言者サムエルの言葉を典型とす

る『王』制の批判があります (Jdc 8,23; 1Sam 8,6f; 10,19; 12,12; Am 7,9; 9,8; Hos 1,4; 3,4; 8,4; 13,10f 等)。」³⁶

例えばサムエル記上 8章 18節には「その日、あなたがたは自ら選んだ王のゆえに泣き叫ぶことになる。しかし、主はその日、あなたがたに答えてはくださらない。」とあります。

「その対立する構図の中で『神が王となった』、『神が王である』という宣言は、まず第一には人間が王となると様々な抑圧、搾取が起こるが、神が王となるとそのような人間の王による支配とは異なる、真の平和が実現するのだ、という待望を表すことになります。」³⁷つまり逆説的な言葉、それ自体には反対概念としての、プロセスとしての意味しかないものとして「国」という言葉が便宜的に、経過的に、方便として使われているということです。あるいは王らしくない王、王国らしくない王国を目指す、神の「国」宣言を行う訳です。

「もう一つ大事な要素は、異邦諸民族の王国の支配を受けてきたイスラエルの民が、それから解放されて、主なる神が王となると、神権政治の王国が確立され、民は救われる、という待望です。」³⁸このように「神の国」という考え方は、他国からの植民地主義に抵抗する力にもなりました。

しかし一方で、時代が経つにつれて、この逆説や抵抗の言葉は、イスラエル自身にとって危うさを含み持った考え方によって変わってしまいます。「ここで準拠枠となっているのは、それぞれの民族、国家に守護神がいて、天上でその神々が争い、勝利した神に属す民が地上で勝利する、という神話的な表象です。ヤハウェが天上で勝利すると、地上でその民イスラエルが勝利し、平和が実現する、という考え方です。しかし、これでは下手をすると、『神の国』とは、オリエントに一般的であった『王』のイデオロギーを単に裏返しただけで、イスラエルの覇権を主張するものだけということになってしまいます。」³⁹「行きつ戻りつ」しないようになるのです。

1) -2 新約聖書の「バシレイア・トゥ・テウー」とイエスの「王国らしくない王国」

次に新約聖書とイエスの神の「国」理解を見ていきましょう。

「これに対して、史的イエスは別の『神の国』理解を提示しました。『神が王となる』『神が王である』事態について、彼は多くのたとえを語りましたが、そこで描かれる『王』としての神の姿は、少しも『王』らしくありません。

たとえば、からし種のたとえの結末の大きな木は世界帝国を暗示するイメージ

ですが、そこで描かれているのは、力で支配し、抑えつけるのではなく、命を守り、育む木の姿です。」⁴⁰ 空の鳥が来て巣をつくる訳ですね。

また、「イエスは『神の国』において実現すると待望されていた盛大な晩餐、メシアの宴の先取りとして、『罪人』たちとの共同の食事を行いました。ヘブライ語聖書では古代オリエントの世界帝国の王が催す祝宴がその原型としてあったわけですが、イエスの晩餐は王宮の絢爛豪華な宴とは似ても似つかない田舎の村のささやかな宴です。そしてそこには社会の上層、エリートたちではなく、下層、抑圧され、搾取され、差別されていた者たちが招かれます。

『神の国』のあり様は、ローマ帝国のように『 $\pi\rho\omega\tau\omicron\varsigma$ 筆頭の者 = princeps 元首』が他のすべての者の上に立って苛酷に支配するのではなく、『筆頭の者』が『すべての者の $\delta\omicron\upsilon\lambda\omicron\varsigma$ 奴隷』である、支配-被支配の構造を顛倒させてしまうあり方です (Mk10,42-44)。⁴¹

マルコ 10 章 42 から 44 節ですが、「あなたがたも知っているように、諸民族の支配者と見なされている人々がその上に君臨し、また、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者となり、あなたがたの中で、頭 (= 元首) になりたい者は、すべての人の僕 (= 奴隷) になりなさい。」神の「国」は、まったく国らしくない。

「こう見てくると、イエスが宣教し、実践した『神の国』を『神の支配』と訳すのは、彼の意図からずれてしまう可能性があります。」⁴² 「『神の国』は、神が王となること、神が王であること、神が王であると起きる出来事、事態、を表しており、イエスの意図では、神が支配すること (古代オリエント以来の王のイデオロギーの準拠枠で発想されている王の権力による暴力支配) ではなく、まさにそのような『支配』を脱構築する新しいあり方を示すものとして使われています。そう考えると、『国』という訳語も大いに問題です。そんなわけで、 $\eta\beta\alpha\sigma\iota\lambda\epsilon\iota\alpha\tau\omicron\upsilon\theta\epsilon\omicron\upsilon$ を一体何と訳したら良いのか、困ってしまっています。」⁴³ と須藤氏は言います。それで私は今回、神の「国」の「国」に鍵かっこをつけました。

これがそもそも、聖書における神の「国」であると言えるでしょう。そして神が、十字架のキリストが王なら、この世界に起きる出来事、事態は何でしょうか。

2) プロセスと目標としての神の「国」、あるいは神の民

その上で、この聖書の神の「国」が先ほどまで申してきました、異なる民が、

共に生きる約束を受け、「痛み」でつなぎあわされて、神の「国」を作り始めるということはどうなるでしょうか。

まず、聖書のメタナラティブ、あるいは救済史に着目してみますと、神の「国」は目標を目指すプロセスであることが言えるでしょう⁴⁴。神は創世記において世界を創造し始めました。神の「国」と後に呼ばれるものを作り始めたとも言えるでしょう。しかし人々は善悪の知識を自分のものとし、つまり価値のある善い命と価値のない悪い命を決めはじめ、神の「国」から遠のきます。それでも神はアブラハムを通し、神の「国」を作り続けようとイスラエルを集める。しかしイスラエルは神ではなく、王を立てる。王国らしい王国を作る。しかしイスラエルにも残りの者があり、そこからイエスがでる。イエスは神の「国」は近づいた、今度こそ実現し始めるという。しかし十字架にかかり、天に帰る。しかし聖霊が送られ、教会が建てられる。教会と言う神の「国」をめざすものが建てられるものの、またイスラエル王国と同じ勘違いをしてしまったように、神の帝国をつくりはじめ。しかし聖書には、まだ最終的な形は見えてない、「ネタバレ」しないオープンな形、教会も誰もまだ答えを知らない、神の「国」の完成を、黙示録で約束されている。これが最初の教会が聖書に読んだメタナラティブでしょう。そうしますと、やはり私たちの国や民族は、さらには教会すらも目標を目指すプロセスにおける存在で、アンビバレントな、プラスにもマイナスにも働く二重性を持ったもの、「行きつ戻りつ」するものとして現れるのだと思います。

このメタナラティブの流れの中、目指される神の「国」は、人間の国や民を超えて完全なものとなるでしょう。「完全」を語源にシャローム、平和という言葉が出てきますが、詩編によれば平和は、神の支配同様、神から与えられる、約束されるもので、人がつくるものでも、一つの国がつくるものでもありません。ですからその意味では、平和も神の「国」も、最終的な目標な訳です。しかし同時に、シャロームと言う言葉を聖書に調べていきますと、ハンス・シュミットが記しておりますが、平和は動的なプロセスとしての意味で書かれてもいます⁴⁵。やはりここにも二重性がある訳です。シュミットは、聖書の平和は「プロセス」、つまり「過程」という意味と、正義のための「訴訟」と言う二重の意味の「プロセス」であるとも言います⁴⁶。

そして現在において、やはり詩編によれば、人にはできること、すべきことがある。それが正義という概念です。正義とは何か。イザヤ書によれば4つの側面があります。一つは抑圧されたものを解放する事、二つ目に抑圧する者の抑圧を

取り払う事、三つ目に非暴力で行う事、四つ目に、最終的にすべての異なるものが共に生きる世界を目指すこと、です。これをイエスが引き継いでいきます⁴⁷。この平和のプロセスとしての正義において、やはり抑圧するものと抑圧されるものは区別される訳です。最終的に共に生きる世界が目指されるとはいえ、そのプロセスにおいては明確に区別されるわけです。

この少し分かりにくい二重性は、新約聖書の終末論にも表れています。イエスは神の「国」が近づいたと現代的かつ将来的な終末論を述べましたが、その後、パウロ、第二パウロ、公同書簡と、現代的終末論と将来的な終末論の間をゆれたり、分かれたりします。ルカのような将来的終末論は、私たちはまだ一つではないのだということを語り（悔い改めの強調等）、ヨハネのような現代的終末論は、私たちはもう一つなののだということを強調します。その聖書の多様性を見ず、「行きつ戻りつ」せずに、都合よく「現在」にしたり、「将来」にしたりすることがキリスト教会でも起こっているなら、注意すべきことだと思います。

ではその異なるものが、しかしかに約束に生き始めるのか、やはり聖書でもそこには「痛み」が、十字架が媒介していると思います。例えばヨハネ福音書の十字架の場面（ヨハネ 19：25 - 30）では十字架のイエスを真ん中に、方やで愛する弟子、方やで3人の女性の弟子たちがいます。愛する弟子は男性や、ギリシャ人や、同性愛者⁴⁸を象徴しているかもしれませんし、女性たちは女性や、ユダヤ人を象徴しているかもしれません。これらの人々が十字架のイエスから「見なさい。あなたの子です。」「見なさい。あなたの母です。」と言われて、実際に弟子がイエスの母を自分の家に引き取る。そしてイエスは十字架で「息を引き取る」のですが、これは「霊を渡す」と言う言葉です。聖霊がこの人々に吹きかけられて教会が出来る。ペンテコステですね。そのような二重性と接点をもつものとして最初の教会は自分を理解したのではないのでしょうか。

3. 実際に、教会はどうするか

最後に、実際に教会はどうするかに触れていきたいと思います。ここでも二重性を考えながら述べていきます。

1) 「未だ」独立していないヤマトの教会として

まず「未だ」独立していないヤマトの教会として何をするか、です。加害者的依存から脱却し、アメリカと天皇制の「奴隷」から自立するために、どうするの

かです。

現状ですが、実際にお話しできるほどのことは申し訳ないことになっておりません。勿論、ゴスペル・アクション in 福岡という、やはり福岡の繁華街にありますアメリカ領事館広報部の前で、普天間基地の皆さんと同じ讚美歌集を使いながら賛美する集まりは、今年で10年になりました。アメリカ領事館広報部の前で行っていますが、天神駅のすぐ前ですので、ヤマトに向かって、決して「悲しんでいる沖縄を解放してあげる」というのではなく、日米安保体制自体をこそ解消していく、その間いかけをしているつもりでもあります。そして現在、「台湾有事」が言われ、米軍でなくとも自衛隊の基地が沖縄の地元の意志を無視してやはり植民地主義的に拡大されている、そのこと自体を止めていくよう訴えています⁴⁹。アメリカに従い、沖縄に植民地主義を続ける、そのヤマトの生き方が人間らしくない、私たちもそこから解放されて、人間らしく生きたい。その世界を賛美歌は、聖書は描いている。その悔い改めと、預言者の声と、希望を歌っているつもりです。

ただ毎日の仕事や生活の中でプログラム化していくことがやはり大切だとも思います。そして平和の神学にも3つの類型がありますが、正しい戦争論（ジャスト・ワー）、非暴力無抵抗（パシフィズム）、そして正しい平和づくり論（ジャスト・ピースメイキング）ですが、この正しい平和づくり論に沿って、安倍晋三ではなく、ヨハン・ガルトウングの言う積極的平和を作り出すということが基本になるのだと思います。神谷さんの講演にあった、「退き、たたかう」ですね。具体的にグレン・スタッセンはジャスト・ピースメイキングの10の指標を上げますが⁵⁰、以下はその指標に沿って行っている事でもあります。

私に与えられた仕事ですと、大学の教員ですが、やはり教育は大きいです。神学部では、次の世代の「正しく怒る」牧師に、ヤマトでもウチナーでもなってもらうことを目指し、牧師等養成の働きを続けています。さらに一般の学生へのキリスト教学でも沖縄とヤマトの植民地主義については必ず触れます。実際、学生たちは期待を上回ってそれを自分の課題にしていってくれていることが、そのレポートなどから分かります。若い人が保守化しているといいますが、経済的に追い詰められればより弱いものをたたきたくなることもあると思います。しかしなぜ私たちが、ウチナーをそうさせていることは勿論、ヤマトもまたこう生きづらいのか共に考えるとき、若い人々は初めてそのような仕組みに気が付くのか、とても主体的な反応をし、その思いをもってやがて社会に出ていく人が多いです。

また神学部では韓国から教員を招き、平和のプログラムをアジアの教会との協

力のうちに展開し始めました。例えば沖縄と韓国の済州島、そして台湾の3つの島を結び、そこを平和の民衆の海にするための青年平和学校というものを開催しています。1回目は沖縄で、そして2回目の今年は済州島で行い、済州島の基地フェンスの前で歌いもするでしょう。3つの島とも、やはり基地の問題や人権の問題を押し付けられています。そして国としては対立する、その違いを知ることが大切であると同時に、同じく一人の市民としては共に連帯できる、それも平和の海をつくるという1点において、それぞれの反基地の取組と言う具体的な「痛み」において共に学び、繋がることをしています。そこには今回、アメリカの教会からも人々を招く計画を今立てています。日米安保体制自体を撤廃したいのですからアメリカ人に、またアメリカの教会に入ってもらうことは必要だと思えます。

またコロナ前は、デューク大学のプログラムでしたが、中国や「北朝鮮」の脅威論自体をなくしていく、減らしていく、それによって国の安全保障ではなく人の安全保障に変えていく、そのために中国や「北朝鮮」も含め、韓国、台湾、香港、そして日本、アメリカの教会のリーダーやワーカーによる和解フォーラムというものも数回開催していました。

あとは大学の図書館に琉球新報を神学部として入れています。

さて私は教会の協力牧師もしておりますから、教会と言う日常でも何が、まだ自立していないヤマトンチュとしてできるでしょうか。

先ほどのアメリカへの安保体制撤廃の呼びかけですが、日本バプテスト連盟として十分にできているとは思いませんので、進める必要があると思います。私は何度も、日本連盟に、またアメリカの宣教団体にも、日本にいる宣教師に沖縄に訪問するように要請しましたが、まだ実現していないと聞きました。

またこれは神学部の教員としてもなのですが、沖縄バプテスト連盟と日本バプテスト連盟で、異なることをわきまえ、その上で、痛みで連帯するプログラムを展開できればと思います。ウチナーとヤマトの関係のモデルとなるように沖縄バプテスト連盟と日本バプテスト連盟の関係を作れるならばと願うのです。異なるものが、しかし同じキリストの教会として、痛みにおいて共に生きる訳です。

神谷さんもそうですが、今回参加してくれている安里さんも、西南学院大学神学部の卒業生です。沖縄バプテスト連盟の牧師を、日本バプテスト連盟に取り込むわけもなく、異なることをわきまえる。そして同時に一つの神の民となる約束を信じて、奨学金制度などは同等にしていく。その制度や環境をより整備する。

そしてこうして続けて言葉を交わし合い、必要な運動ができてきたら連帯する。このつながりがさらに続いていくことを心から願っています。

沖縄バプテスト連盟と日本バプテスト連盟の間の関係も、悔い改めるべきことがありました。最初の方でもうしました沖縄を「国外」と位置付けて伝道をしたことに対する悔い改めの、98年総括を読み直しながら、またお話してきた二重性を考えながら、ひとつ思い浮かんだことがあります。それは「第三 今後の歩み」のところですが「⑤ 新しい沖縄伝道に当たっては、その歴史的、状況的重要性に基づき、それを準備し、また推進するための具体的な取り組みを開始する。」⁵¹とあります。実際、日本バプテスト連盟の那覇新都心教会が2001年に伝道を開始しています。そして那覇新都心教会と岡田両牧師はそのミッションステートメント「イエスキリストにあって (1) 隣人となり地域に仕える (2) 沖縄、他都道府県、アジアの平和と和解の架け橋となる (3) キリストの平和を実現する人々を送り出す」を追求してきました。良いヤマトンチュになろうとなさってきたこととします。ただ、この伝道は沖縄の「その歴史的、状況的重要性に基づき」、日本バプテスト連盟の伝道プロジェクトとして始まったヤマトのプロジェクトですから、プロセスとしてはそれでよいのだと思いますが、最終的には沖縄バプテスト連盟に返していく段階もあると、感じました。教会、エクレーシアとは建物や組織ではなく、人々の事ですから、ウチナンチュの教会にヤマトンチュの牧師が私などに紹介されて入れ替わり立ち替わりやってくる意味は何かと思うのです。そして沖縄連盟の教会になったとして、それで那覇新都心教会と日本バプテスト連盟との関係や人々との関係が変わる訳でもないと思うのです。

ただしヤマトンチュが沖縄で自らの加害者責任をとるためのセンターとしてヤマトによる教会や牧師もまた存在する意味はまだ続いていくとは思いますが。さらに、単純に沖縄バプテスト連盟の一教会になると、また日本バプテスト連盟が沖縄を「国外」と位置付けることに結果としてなってしまうかもしれません。ですから、本日申し上げてきた二重性のもと、沖縄バプテスト連盟と日本バプテスト連盟の両方に加盟するのが良いかもしれません。

2) 「既に」市民と共にプロセスとしての神の「国」を、痛みでつながりつつ歩む教会とは

最後に今度は、「既に」市民と共にプロセスとしての神の「国」を、痛みでつながりつつ歩む教会は何をするかに触れて終わりたいと思います。これは1) で述べてきたことの向こうに、どのような日常を、世界を目指しているのかに関係し

ていきますので、必ずしも直接基地問題に関係していないこともあります。やはり植民地主義から解放された世界が近づいたことを告げる教会の働きに関係してくると思います。

一つには、ヤマトの責任、アメリカ等の責任も問いつつ、最終的には国家を自明なものにしない運動になっていくことを見据えていることが大切でしょう。国家は国家をなくしていく働きをする時にのみ意味があると考えても良いかもしれませんが。その意味で、現在の岸田政権のしようとしている先制攻撃論を国家のためにするというならば、もはや国家など無い方が良い訳です。これが、教会が国家の見張り人になるという働きの内実だと思えます。饒平名氏の言葉で言えば「最終的には国家のない状態であって、軍事力のない、支配力のない、強制力のない社会、その連合体（世界共和社会）ですね。そういう意味で、憲法九条は、沖縄にとっていろいろな問題があるけれど、大事なことで、日本も憲法九条を『守る』んじゃないくて、むしろ世界に向けて積極的に『展開』していくべきだと思います」⁵²とありますが、私もこれまで護憲運動ではなく、選憲運動（上野千鶴子氏の言葉ですが）、九条を今は選び、それを正義の平和づくり論、つまり非暴力無抵抗のパシフィズムではなく、非暴力抵抗のジャスト・ピースメイキングの理論として解釈すべきだと言いつつ続けてきました。それがやはり大切に思えます。

今回、テーマが「信仰と国家」ですが、国家はプロセスとしては重要ですが、神の鍵括弧付き「国」においては、自明なものではありません。カール・バルトは、戦後の1946年に「キリスト者共同体と市民共同体」⁵³を書いています。教会をキリスト者共同体、国家を市民共同体と言い換えています。これはバルメン宣言の第5テーゼ「国家は、教会もその中にあるいまだ救われないこの世にあって」という考え方を発展させたものかもしれません⁵⁴。つまりその存在は自明なものではなく、国家は国家をなくするために、また教会もまた教会をなくするために、ただし終末においてですが、しかしそこを目指すように今日の具体的一歩を歩むということではないでしょうか。

ですから教会のメッセージも変わるかもしれません。神のイメージ、救いのイメージが変わるのです。沖縄の、解放の神学の言葉ですが「神学的特権」、ヤマトには見えないことを特権的に見ることができる、その特権から学びますと、痛みを接点として、沖縄と言う具体的な足場が、普遍的な言葉やプログラムへと展開していくことを思います。

たとえば、饒平名氏の本にも、沖縄以外の痛みとの連帯は随所に記されています。また一例として、日本の教会では現在、「NBUS」（性の聖書的理解ネットワーク）というグループが、アメリカの南部バプテスト連盟の委員会も起草者となって作成された「ナッシュビル宣言」を推進するという運動をしています⁵⁵。その中、以前セクシュアル・マイノリティ当事者のためのクリスチャンの集いである「キリストの風集会」⁵⁶がアンケート調査をした際に、沖縄バプテスト連盟の東風平教会が「あなたの教会で同性同士で結婚はできますか？」という問いに対して「現在、正牧師がいないのでできません。3年後からできると思います。」と答えていて、私は印象的に覚えていたのですが、その東風平教会の牧師として昨年からは西南神学部の卒業生である安里さんが牧師として赴任しました。そして彼がした、今回の開会説教を本当に嬉しく聞きました。象徴的ではありますが、そのような広がりもまた沖縄の教会の神学的特権が活かされている例だと思いました。

玉城福子さんの言葉を使えば、「共感共苦（コンパッション）の境界線」⁵⁷を越えていくということが、一つの具体的な足場にこだわるからこそ、結果的に起こってきているのだと思います。共感共苦の境界線ですが、同じ痛みや苦しみでも、これこれの条件を満たすならば、共感共苦するけれど、そうでないなら共感共苦しないといった境界線が政治的につくられるということです。それを沖縄の神学は超えていき、また広島神学は栗原貞子の詩のようにそれを超えることに眼目がありましたし、ヤマトの神学もそれを目指すべきだと思います。そうした時に、ヤマトの教会のさまざまな解放運動自体が、まだ自ら含み持つ加害者としての依存からの脱却を歩み出せるのだと思います。それは言い換えれば、イデオロギーではなく、ライフスタイルを変える運動にすることかもしれません。日常が変わることで、軍事基地など政治を変える運動が徹底化されていくわけです。

またメッセージがどう変わっていくかですが、一つには贖罪論中心から十字架の神学的解放の福音へ神学的な物語が変わっていくことが起こってくるのではないのでしょうか。言い換えれば、個人救済のみを与え、人を管理支配する「父なる神」ではなく、神の「国」を約束し、実践へ招く神に変わる訳です。

そうしたときに教会が変わっていきます。かつて私は、『日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか』という、誤解を与え得るタイトルの小冊子を共同研究会で出したことがあります。その「実を結ばなかった」理由のひとつに日本の教会はずっと「お上」に認められることを求めてきたというものがありまして、これはそうだと思います⁵⁸。「お上」やその町のマジョリティの支持ではなく、痛みを

負わされたマイノリティーのハブとしての教会が良きヤマトンチュの教会になるのではないのでしょうか。

色々申しましたし、本当は実例を挙げるべきですが時間がありません。そしてこれは私の足場ですべき事柄を細々としたことでしたが述べたもので、ぜひ皆様の足場で何をなさっているのか教えてください。

「異なるものとして、痛みでつながれ、共に生きる、神の民を目指す」これが今回、最初から最後まで申し上げてきたことです。それが、良きヤマトンチュの教会のこれからであると私は思います。

〈註〉

- 1 本稿は沖縄宣教研究所・富坂キリスト教センター 第5回共同研修会「植民地主義と神の国の宣教 V～国家と信仰～」における筆者の講演原稿であり、内容や文体も講演時のものに基本的に留めた。
- 2 饒平名長秀『待ちつつ、早めつつ：キリスト道に生きる』2014、神愛バプテスト教会、59頁。
- 3 ウォード・ウィルソン（黒澤満 日本語版監修）『核兵器をめぐる5つの神話』（法律文化社、2016）等参照。
- 4 日本共産党、しんぶん赤旗 2017年11月21日号、https://www.jcp.or.jp/akahata/aik17/2017-11-21/2017112101_03_1.html（2023.2.12 閲覧）
- 5 本論ではこの3点を以下、解放の神学あるいは公共神学的に、さらには不十分ながらも聖書学的にも理論づけていく。本論の中では展開していないが、哲学的あるいは思想的に理論づけるならば、ジュディス・パトラーの「批判的共同性」についての言説が近くなるであろう。パトラーは『非暴力の力』（佐藤嘉幸他訳、青土社、2022）で、筆者の「異なる者」が「共に生きる」二重性という言説の理論づけになるであろうが、「私たちが相互に結び付ける義務は、私たちの生を可能にする相互依存という条件から得られるが、それはまた、搾取や暴力の一つの条件にもなり得る」（53頁）と言う。そしてこの二重性における接点に「痛み」がなるとの筆者の言説の理論づけになるであろうが、「哀悼可能性」という概念を提示する。そしてこれらの構造をヘーゲルとカントの間に生じる人間と社会を形成するダイナミズムに位置付ける（対論相手であるユルゲン・ハーバーマース「第四章 脱超越論化への道 — カントからヘーゲルへ、そしてヘーゲルからカントへ」『真理と正当化：哲学論文集』、三島憲一他訳、法政大学出版局、2016、参照）。箭内任「不服従と抵抗の理論（その2）—愛から批判的共同性へ：パトラーからアーレントに倫理を送り返す—」『尚綱学院大学紀要』84、2022、1-14頁、参照。
- 6 饒平名、上掲書、55頁。
- 7 日本バプテスト連盟第47回定期総会「沖縄『国外』伝道に関する総括（1998年）」：<https://bapren.jp/archives/joumu/19981111> E6 % B2 % 96 % E7 % B8 % 84 % E3 % 80 % 8C % E5 % 9B % BD % E5 % A4 % 96 % E3 % 80 % 8D % E4 % BC % 9D % E9 % 81 % 93 % E3 % 81 % AB % E9 % 96 % A2 % E3 % 81 % 99 % E3 % 82 % 8B % E7 % B7 % 8F % E6 % 8B % AC % EF % BC % 88 % EF % BC % 91 % EF % BC % 99 % EF % BC % 98 % E5 % B9 % B4 % EF %

BC% 89-2 (2023年3月14日閲覧)

- 8 饒平名、上掲書、223頁。
- 9 同書、64頁。
- 10 同書、49頁。
- 11 高橋哲哉『犠牲のシステム：福島・沖縄』集英社新書、2012。
- 12 広辞苑、第七版、2018。もともと、高橋が表現したいのは省略した1番目の宗教的な意味で、「天地・宗廟を祭る時に供える生きた動物。いけにえ。また、供儀のために殺した動物、ごく稀には植物（穀物など）」かもしれない。いずれにせよ議論に齟齬を生む曖昧さが残る。
- 13 高橋哲哉『国家と犠牲』NHK ブックス、2005。
- 14 『福音と世界』2018年3月号、30-37頁。
- 15 高橋哲哉『日米安保と沖縄基地論争』朝日新聞社、2021、26頁等。
- 16 『富坂キリスト教センター紀要』第8号、2018、222頁。
- 17 神谷武弘「沖縄の神学（その二）－沖縄の『現実』に立脚して」、第5回沖宣研・富坂共同研修会、講演レジュメ、15頁。
- 18 上記座談会で、第1の層について、高橋は基地引き取りは「ポジショナリティから本土（ママ）の有権者が解放されること」（34頁）と言うのに対し、工藤万里江は「加害者としての私のポジションは、私自身がいくら差別をやめたいと願っても変えられないということにいつも葛藤しているので、あっさり『変えられる』と言われるとすごく違和感があります」（36頁）と応答しているので、三者を同一の主張をしているとまとめることも、同一の方向性の発言があることは確認するものの、必ずしも正確ではない。その上で、筆者が以下述べているのは、ポジショナリティは変わらぬままに、しかし解放という「約束」をも現実として認識する、後述の「行きつ戻りつする」方法論である。
- 19 神田健次監修、加藤誠訳『和解と癒し：21世紀における世界の伝道・宣教論』キリスト新聞社、2010、15-76頁。
- 20 同書、42頁。
- 21 同書、43頁。
- 22 以下、基本的に聖書協会共同訳をから引用する。
- 23 エフェソの信徒への手紙4：26
- 24 饒平名、上掲書、87頁。
- 25 同上。
- 26 同書、87-88頁。
- 27 Salim J. Munayer, Lisa Loden, *Through My Enemy's Eyes*, Paternoster, 2014, 220-221頁。
- 28 栗原貞子『ヒロシマというとき』三一書房、1976。松本滋恵『行動する詩人 栗原貞子：平和・反戦・反核にかけた生涯』溪水社、2023、83-109頁参照。
- 29 同上。
- 30 富坂キリスト教センター編『沖縄にみる性暴力と軍事主義』お茶の水書房、2017、i頁。
- 31 玉城福子『沖縄とセクシュアリティの社会学』人文書院、2022、264頁。
- 32 同書、141頁以降。
- 33 饒平名、上掲書、88頁。
- 34 デイヴィッド・ボッシュ（東京ミッション研究所）『宣教のパラダイム転換 上』新教出版社、1999、「第七章 中世ローマ・カトリックの宣教パラダイム」参照。

- 35 同書、370頁。
- 36 須藤伊知郎氏の筆者への、2022年11月16日付のメール。以下、引用が多過ぎるが、研究報告ということでお許し願いたい。
- 37 同メール。
- 38 同メール。
- 39 同メール。
- 40 同メール。
- 41 同メール。
- 42 同メール。
- 43 同メール。
- 44 東方敬信『文明の衝突とキリスト教：文化社会倫理的考察』教文館、2011、164-189頁参照。
- 45 ハンス・P・シュミット（南吉衛訳）『平和：徹底的な挑戦』新教出版社、1973、参照。
- 46 同書、112-113頁。
- 47 グレン・H・スタッセン、デービッド・P・ガッシー（棚瀬多喜雄訳）『イエスの平和を生きる：激動の時代に読む山上の説教』東京ミッション研究所、135-184頁参照。
- 48 小林昭博『クエアな新約聖書：クエア理論とホモソーシャル理論による新約聖書の読解』風塵社、2023、3-102頁参照。
- 49 現在、軍備増強のための「公共インフラ整備」リストには博多港等、九州、四国の空港や港湾の施設が入れられており、それに対する反対のアピールも同じ集まりで行っている。ウチナーをヤマトが「捨て石」にしようとしてきたのと同様、九州、四国もヤマトにおける「捨て石」とされつつある。ここでも「痛みによる連帯」は必須に思われる。朝日新聞記事「空港や港の『軍民両用』めざす政府 専門家『むしろリスク高まる』」2023年11月27日記事参照。
- 50 スタッセン等、上掲書、234-242頁。
- 51 日本バプテスト連盟第47回定期総会、上掲ウェブサイト。
- 52 饒平名、上掲書、91頁。
- 53 カール・バルト（蓮見和男訳）「キリスト者共同体と市民共同体」『カール・バルト著作集7』新教出版社、1975、199 - 238頁。
- 54 カール・バルト（雨宮栄一訳）「バルメン宣言第五項をめぐる対話」上掲書、309 - 322頁。
- 55 性の聖書的理解ネットワーク「NBUS」<https://www.nbusjapan.com/>（2023.12.21 閲覧）
- 56 キリストの風集會 <https://kirikaze.raindrop.jp/>（2023.12.21 閲覧）
- 57 玉城、上掲書、134頁。
- 58 研究会Fグループ『共同研究 日本ではなぜ福音宣教が実を結ばなかったか』、研究会Fグループ（いのちのことは社発売）、2012 参照。